

令和 7 年 7 月 1 日施行
事務局長決定

公益財団法人東京都スポーツ協会主催大会運営に係る危機管理マニュアル

1 目的

本マニュアルは、公益財団法人東京都スポーツ協会（以下「本協会」という。）が主催する大会等（以下「大会」という。）において事故の防止対策、及び万が一の事故等が発生した場合を想定して、事前対策、発生時の応急対策、それに引き続く事後対策について規定するものとする。

2 対策

(1) 事前対策

本協会は、毎年適切な時期に、本協会加盟団体（以下「団体」という。）に対し、危機管理体制の周知徹底を図る。

大会を主管する団体は、万が一事故が発生した場合を想定し、大会会場周辺の AED の設置箇所を確認するとともに会場周辺の救急病院を掌握しておくこと。必要に応じて、医師及び看護師等を配置するものとする。その他必要に応じて、保険の加入及び事前に大会会場の近隣の医療機関に対応依頼等を行い、調整しておくこと。

また、大会等当日の会場準備については、器材などが風にあおられて倒れたり、飛ばされたりすること等がないよう事故防止には万全を期すとともに、特に下記の事項について事前によく調べておき、対応策を決定しておくこと。

- ① 当日の天気予報（特に大雨や雷雲などについて）
- ② 避難場所・誘導経路の確認（観客を含む）
- ③ 活動中止の決定、連絡フローの決定
- ④ 熱中症予防のための WBGT（湿球黒球温度）の測定計の用意
- ⑤ AED 設置箇所の確認
- ⑥ 地震や天気予報等の速報を聞くことができるラジオ等の用意

(2) 応急対策

- ① 事故等が発生した場合、主管する団体が中心となり応急手当を実施する。さらに、けがの状況を判断し、状況に応じて 119 番通報等（救急病院搬送の手配）を行うとともに、本協会へけが人の氏名、状況等を連絡する。
- ② 本協会は、状況を把握するとともに、大会等主管団体と連携を取り円滑な対応ができるようにする。

(3) 事後対策

- ① 大会等主管団体は、事故報告書を作成の上、本協会へ送付する。
なお、様式については、【参考様式】を基に大会の内容に応じた様式を作成すること。
- ② 本協会は、状況を把握するとともに、大会主管団体とともに、誠意をもって事後処理にあたる。本協会もしくは主管団体等において、保険金請求手続きがある場合は速やかに保険会社と連絡調整する。

3 警報発令時の対応について

- (1) 実施日の前日もしくは当日、あらかじめ設定した時点において（当該地区限定の気象情報にて）大雨・洪水・暴風いずれかの警報が発令されている場合、大会等は原則中止とする。
- (2) 大会等実施中に警報が発令された場合、
屋外競技については参加者を最寄りの安全な場所に避難誘導するとともに、警報が解除されるまで参加者の安全確保に努める。
屋内競技については、参加者が施設から出ないように対応し、警報が解除されるまで参加者の安全確保に努める。

4 雷への対応について

屋外種目については、事前に気象情報等を確認するとともに、危険・兆候が確認されたら試合・練習にかかわらず躊躇なく中断・中止するなど、雷の発生に細心の注意を払い、落雷事故防止に万全を期すこと。

『落雷事故防止対策について』

- (1) 事前の情報収集
 - ・気象庁提供情報の「雷注意報」や「雷ナウキャスト」などで、実際にどこで落雷・雷発生が高まる予測になっているのか情報収集を行う。
 - ・事前に危険が予想される場合には、日程・時間を調整する等の対策を講じる。
- (2) 目視・音での確認
 - ・積乱雲がみるみる大きくなる、急に冷たい風が吹く、黒い雲が近づき暗くなる。
 - ・雷光が見える、雷鳴が聞こえたら ⇒ 直ちに (3) 避難行動を開始する。
※雷鳴が聞こえた時には、既に約 10km 以内で雷が発生
- (3) 避難行動
 - ・雷光・雷鳴を確認したら、直ちに試合を「中断」「中止」する。
 - ・参加者を安全な場所（自動車等の乗り物や、鉄筋コンクリート製の建物の内部など）へ避難誘導する。
 - ★近くに安全な建物や乗り物がない場合
電線や鉄塔、電柱の高さ 5m 以上の高い建物の付近。ただし 2m 以上離れる。

※木は電気を通しにくいいため側撃が起こりやすく距離を取っても危険

(4) 試合を「再開」あるいは「中止」

気象情報提供先より周辺の落雷・雷注意報を確認した上で判断する。

- ・「試合再開」 → 雷鳴・雷光が止んでから 30 分経過
- ・「試合中止」 → 雷鳴・雷光が止む予想がない場合

参考：JFA「サッカー活動中における落雷事故防止対策について」

5 熱中症への対応について

『熱中症事故等の防止について』

- (1) 熱中症は、未然に防止できることや、大会参加者の健康や生命に甚大な影響を与えることを、本協会及び主管団体が十分に認識した上で大会運営に当たること。
- (2) 大会等参加者に自己の健康管理に十分留意するよう繰り返し注意喚起すること。
- (3) 暑熱環境下において大会等を実施する場合においては、「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」（（公財）日本スポーツ協会発行）及び「競技者のための暑熱対策ガイドブック」（日本スポーツ振興センター発刊）の最新情報を十分理解し、環境条件や必要に応じて試合数・内容・時間・場所等を変更するなど柔軟に対応するとともに、競技ルールや慣例にとらわれず、水分補給や休憩を励行し、適切に暑熱対策を講じること。

★熱中症予防運動指針

WBGT (°C)	湿球温 (°C)	乾球温 (°C)	運動は 原則中止	特別の場合以外は運動を中止する。特に子どもや高齢者の場合は中止すべき
31	27	35	厳重注意	熱中症の危険性が高いので、激しい運動や持久走など体温が上昇しやすい運動は避ける。10～20分おきに休憩をとり水分・塩分を補給する。暑さに弱い人※は運動の軽減または中止。
28	24	31	警戒	熱中症の危険が増すので、積極的に休憩をとり適宜水分・塩分を補給する。激しい運動では、30分おきくらいに休憩をとる。
25	21	28	注意	熱中症による死亡事故が発生する可能性がある。熱中症の兆候に注意するとともに、運動の合間に積極的に水分・塩分を補給する。
21	18	24	ほぼ安全	通常は熱中症の危険は少ないが、適宜水分・塩分の補給は必要である。市民マラソンなどでは、この条件でも熱中症が発生するので注意する。

※暑さに弱い人：体力の低い人、肥満の人や暑さに慣れていない人など

- 1) 環境条件の評価には WBGT（暑さ指数とも言われる）の使用が望ましい。
- 2) 乾球温度（気温）を用いる場合には、湿度に注意する。
湿度が高ければ、1 ランク厳しい環境条件の運動指数を適用する。
- 3) 熱中症の発症のリスクは個人差が大きく、運動強度も大きく関係する。
運動指針は平均的な目安であり、スポーツ現場では個人差や競技特性に配慮する。

※WBGT（湿球黒球温度）の算出方法

屋外で日射のある場合

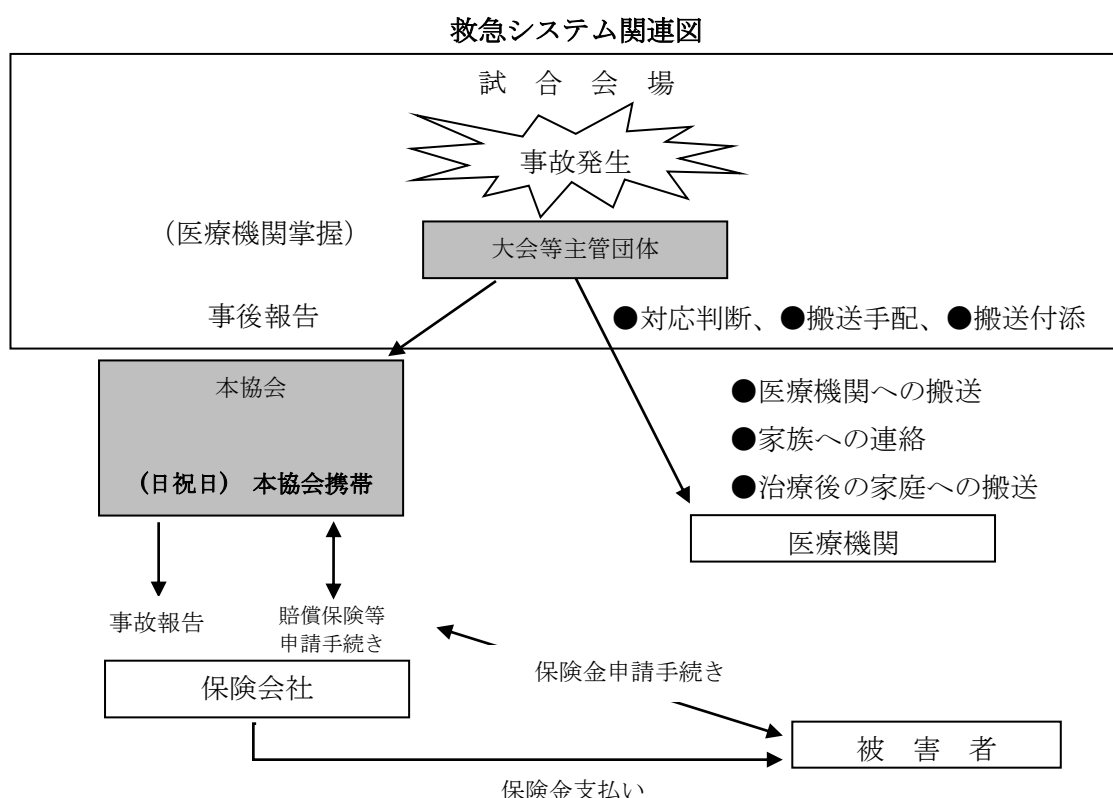
$$WBGT = 0.7 \times \text{湿球温度} + 0.2 \times \text{黒球温度} + 0.1 \times \text{乾球温度}$$

屋内で日射のない場合

$$WBGT = 0.7 \times \text{湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$$

※WBGT 近似値を測定して熱中症危険度を表示する「小型・携帯型の WBGT 計」を使用する際は誤差を考慮すること。

参考：（公財）日本スポーツ協会「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」



6 その他

- (1) 本協会加盟団体が主催等する大会については、このマニュアルを基準として、危機管理マニュアルを作成し、実施するものとする。
- (2) 休日に実施される大会の場合の緊急連絡先は、別途主管団体に本協会の携帯番号をお知らせする。